書　評

多賀太『男子問題の時代？錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』(学文社、2016年)

宮　田　りりぃ

評者が男性学に出会ったのは今から８年程前。男の子だというだけで、「泣き言を言わない」、「他人に依存しない」といった固定的なイメージを周囲から期待されることに長年モヤモヤとした気持ち悪さを感じていた評者にとって、男性学はそうしたモヤモヤを取り除き、すっきりと解消してくれる可能性に開かれた学問であった。だが、当時は男性学の書をいろいろと読みたいと思っても、書店に並ぶジェンダー学関連の書のほとんどは女性問題を取り上げたものであり、男性学の書は数冊しかないという状況であった。それが、今や男性問題を取り上げた書もずいぶんと増え、世の中の男性問題への関心の高まりを感じさせる。ただし、それらの書で関心が向けられてきたのは、主として青年期以降の男性についてであり、本書で筆者が指摘するように学齢期の男子についてはそれほど関心が向けられてこなかった。

ところで、はじめて本書のタイトルを見て、「男子問題の時代が到来しつつあることを告げる内容だろう」と考える人は少なくないかもしれない。だが、本書はそれ程単純な書ではない。むしろ、「男子問題の時代が到来した」といった意見には慎重な態度を示しつつ、男子問題を中心に、ジェンダーと教育に関して錯綜する見解や主張を適切に理解するために書かれた男性学の書である。

本書によると、従来性別に基づく差別といえば、女性差別を指すものとみなされてきた。しかし、近年では差別されているのはむしろ男性の方であるといった声も聞こえてくる。また、男と女は異なるのだから、男女平等などありえないといった声があがる一方で、そもそも男女の違いを語ること自体へのさまざまな批判の声もあがっている。著者は、このようにジェンダーに関してさまざまな声が錯綜する状況に対し、絶対的に正しい（あるいは間違っている）見解はなく、むしろどの見解も、少なくともある一面を適確に捉えたり、一定の人々の生活実践に根差しているに違いないと説明する一方、そうした錯綜状態だけでは議論は前進しないと指摘する。そして、前進するためには「異なる見解を持った人々が、少なくとも同じ土俵に立ち、共通のルールに則って議論を戦わせる必要があるのではないだろうか」と訴える。

そこで、筆者が本書において試みたのは、ジェンダーと教育に関して錯綜するさまざまな見解や主張を解きほぐして整理した見取り図を示すことによって、生産的な議論に寄与することである。本書の特徴は、何といってもそうした見取り図を示す過程において、男性学・男性性研究の知見を、これまで男性学を学んだことがない人でも身に着けることができるやさしい解説と、絡まり合う糸がスルスルとほどけていくような、錯綜する議論を解きほぐしていく心地よい展開である。

それでは、ここからは本書の内容を３つに大別しつつ、各章について紹介していきたい。なお、本書の構成は次のとおりとなっている。

第１章　男子問題の時代？　――男子をめぐる論争の展開と構図――

第２章　男性支配のパラドックス　――男の生きづらさ再考――
第３章　下落する「男らしさ」の市場価値――産業構造の変化と男性支配の再編――
第４章　ジェンダーの正義をめぐるポリティクス　――保守・平等・自由――
第５章　個性尊重のジレンマ　――〈男女平等教育〉の実践事例から――
第６章　分けるか混ぜるか　――別学と性別特性をめぐる言説の錯綜――
第７章　男子研究の方法論的展開　――「ジェンダーと教育」研究のさらなる可能性――

まず、男の子や若い男性が直面する諸問題とそれらに関するさまざまな見解の錯綜をテーマとして掲げた、第１章から第３章である。第１章では、学齢期の男子問題に関心が向けられる西洋諸国における語りと、青年期の男性問題に関心が向けられる日本における語りとを比較し、両者の差異が生じる社会的背景に迫っている。第２章では、女性に比べて男性の方が圧倒的に優位な社会状況にも関わらず、近年男性の生きづらさが盛んに語られるという逆説的な現象のメカニズムを、「男性性の社会理論」を手掛かりに解明することを試みている。第３章では、仕事で必要とされる能力とその選抜環境の変化に着目し、依然として男性と女性とが対等に能力を競い合えず、男性にとって有利な労働市場が再編される過程とその背景に迫っている。

次に、教育においてジェンダー問題を考えるうえでの基本コンセプトの問い直しを試みた、第４章から第６章である。第４章では、学校教育とジェンダーに関わるさまざまな主張を整理して把握するために、それらを「ジェンダー保守主義（固定的で非対称な男女のあり方を守ろうとする立場）」、「ジェンダー平等主義（男女の利害関係や権力関係における非対称性に焦点を当て、そうした非対称性の解消を目指す立場）」、「ジェンダー自由主義（性別とのかかわりで個人の選択が規制されることを問題視し、個人の生活や人生のあり方を個人の自由な選択にゆだねることを目指す立場）」という３つの類型とそのサブタイプとして捉え、それぞれの対応関係を整理しながら生産的な議論の方向性を提起している。第５章では、〈男女平等教育〉に取り組んだある小学校での事例に基づき、〈男女平等教育〉の困難の原因が、実は「個性尊重」という〈男女平等教育〉の中核に据えられた基本的方針自体に存在している可能性を指摘し、それを乗り越える方向を探っている。第６章では、「男女別学と男女共学のどちらがよいのか」、「男女は生まれながらに異なる特性をもっているのか」という、ジェンダーと教育に関する近年の代表的な２つの争点を比較しながら、別学・共学論を不毛な水掛け論に終わらせずより実りあるものにしていくための道筋を検討している。

最後に、第７章では、ジェンダーと教育に関する研究の動向を、それらが男子をどう捉えようとしてきたのかという観点から確認し、男子研究がさらに進展していくために有効な視点と枠組みを提起している。

さて、ここで再び私事になるが、評者は多様な性のあり方に関する市民活動に関わる中で、異なる立場の人々による「あるべき論」がぶつかったりすれ違ったりして、議論がほとんど進まず悩むことが多い。だが、本書を読みながら、「さまざまな主張同士の論理的な関係を整理し、噛み合わない互いの主張は、いったいどこですれ違い、どこでぶつかり合っているのかを冷静に判断していく作業」がこれまでは不十分であったことを痛感した。たとえ相手の意見が到底納得できるものではないと思っても、意見のぶつかり合いやすれ違いがなぜ生じたのかについ

て、冷静に振り返り検討することの意義について本書は気づかせてくれたのである。

ところで、本書を読み終えた後、ふとタイトルに付けられたクエスチョンマークが目に入り、「ひょっとしたらこのタイトルは読者に向けられた問いなのかもしれない」と思った。すでに述べたとおり、本書は教育とジェンダーに関して錯綜する見解や主張の中から、「正しい」答えは何かを導きだすものではない。しかし、その代わりに本書が提供する男性学・男性性研究の知見や多角的な視点は、その答えを私たち自身が考えるための力となってくれるはずである。